

# ネパール仏教のダシャカルマ・ プラティシュターについて

藤 森 晶 子

## 0. はじめに

ネパールのカトマンドゥ盆地に住むネワール人により信仰されているネワール仏教では、寺院の仏像を塗り替える際、または新たに仏像を安置する際に、「ダシャカルマ・プラティシュター」(Daśakarmapratīṣṭhā, 以下 DP) という儀礼が行われる。DP は、プラティシュターとネワール仏教徒の人々が行う 10 種の通過儀礼である「ダシャカルマ」<sup>1)</sup> が組み合わされたものである。11-12 世紀頃にネワール人僧クラダッタにより記された『クリヤーサングラハ・パンジカー』*Kriyāsaṃgrahapañjikā* (以下 KSP) 第 6 章「尊像などへのプラティシュター」(pratimādīpratiṣṭhā) には daśakriyā と呼ばれる 10 種の通過儀礼と 9 種の灌頂について述べられており<sup>2)</sup>、DP はこの儀軌の影響を受けていると (Rospatt 2010) は指摘している<sup>3)</sup>。本稿では 2011 年 2 月にカトマンドゥ市で行われた DP の次第を述べ、その特色について考察する。

## 1. DP の次第

筆者は 2011 年 2 月 11 日、12 日の 2 日間、カトマンドゥ市のテク地区にあるブッダバリ寺院 Buddhavarī Bahā で行われた DP を観察する機会を得た。この儀礼は、ブッダバリ寺院の本尊である燃燈仏 (ディーパンカラ・ブッダ) の像を 12 年に一度塗り替える行事の一環として行われた。またネパール政府は 2011 年を観光年と定めており、この儀礼はその記念も兼ねていた。この日の儀礼においては「導師」(mūlācārya) はサルヴァッギヤ・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏が務め、補助的な役割を担う「ウパーディヤーヤ」(upādhyāya) はギャナマン・ヴァジュラーチャールヤ氏が務めた。施主は、ブッダバリ寺院に所属する僧やその家族 26 名であった<sup>4)</sup>。また、同時に「イヒ」(Nw.Ihi) が行われた。「イヒ」とは、思春期前の少女たちが行う通過儀礼であり、ヒンドゥー教徒、仏教徒を問わずネワール族の少女が行うベルの実との儀礼的な結婚である。ヒンドゥー教徒にとってこの

## (8) ネパール仏教のダシャカルマ・プラティシュターについて (藤 森)

ベルの実はシヴァ神の息子スヴァルナクマーラもしくはヴィシュヌ神<sup>5)</sup>と、仏教徒にとっては菩提心そのものと見なされている<sup>6)</sup>。また、イヒは独立した形では行われず他のネワール仏教儀礼とともに行われる<sup>7)</sup>。

ネワール仏教僧ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏によると、ブッダバリ寺院で行われた「ダシャカルマ」の10項目とは①誕生式 (jātakarma), ②命名式 (nāmakarma), ③お食い初め (果物のお食い初め phalaprasāna および穀物のお食い初め annaprasāna), ④喉開け式 (Nw.kanṭhakhuye), ⑤入門式 (upanayana), ⑥剃髪式 (cūdākarma), ⑦受戒式 (vratadeśana), ⑧還俗式 (vratamokṣana), ⑨結婚式 (pāṇigrahaṇa), ⑩プラティシュター (pratiṣṭhā) の10の儀礼をさすという。以下にその次第を述べていく。

## 2. ブッダバリ寺院の DP

〈第1日〉1日目のはじめに師マンダラや三三昧などの準備的儀礼が行われ、その後中心的儀礼である「ダシャカルマ」の最初の次第①誕生式が行われる。この日はウパーディヤーヤが本尊へ DP を行い、導師がイヒを行っていた。ここでは仏像を白い布で覆った後しばらくしてその布の取り外しが行われる。これにより新しい仏が誕生したと考えられる。一方、導師の指示のもとイヒを受ける少女は師マンダラ供養を行う。誕生式が終わると、②命名式が始まる。ここで沐浴させた本尊に対し「オーム、アーハ、ディーパンカラ金剛と名付ける云々」という真言を唱え、本尊を命名する。命名式の後、③果物と穀物による二種のお食い初めの儀礼が始まる。ここでは僧が真言を唱え、施主が果物やほら貝の水で浄化したポップライスを本尊へ捧げる。

お食い初めが終わると、④喉開け式が行われる。僧は、本尊へ「チャタマリ」(Nw.chatamari) と呼ばれるお菓子などを捧げて喉の浄化を行う。これにより仏が初めて言葉を獲得すると考えられている。喉の浄化が終わると⑤入門式が行われるが、ここではほぼ僧による真言の読誦と観想が行われるのみで目立った行為は見られなかった。続く⑥剃髪式では、僧は「オーム、一切の障害を浄化するために、一切の無知である髪は切られるべきである云々」という真言を唱え、黄金の剃刀で本尊が剃髪することを観想する。さらに、本尊へ宝冠を被せ灌頂を行う。剃髪式が終わると、⑦受戒式が行われる。ここでは、仏が「衆生が智慧を獲得できるように」と願うさまを僧が想起する。その後の⑧還俗式では、僧が世界中を遊行している仏に対しこの儀礼の場所へ戻ってくださるよう懇願し、仏が比丘の

衣服を脱ぎ還俗することを観想する。以上で1日目が終了した。

〈第2日〉2日目はダシャカルマの⑨結婚式、⑩プラティシュターを中心に儀礼が行われた。まず、1日目と同様に準備的儀礼を行った後⑨結婚式が行われ、同時にイヒでは少女たちとベルの実との結婚が行われた。まず、ウパーディヤーヤが「オーム、一切如来の身体の浄化のために、スヴァーハー」と唱え金と銀の爪切りで本尊の爪を切り、香油で本尊の身体を塗り清めるという行為を観想する。続いて僧はベルの実が菩提心であることを観想し、用意したベルの実に五種供養やニーラージャナ（灯明をかざす行為）などを行う。更に僧はそのベルの実を葉が敷かれた皿にのせ本尊の前に置き、葉ごとベルの実を糸で縛る。一方、導師はイヒの少女たちに五甘露を用い灌頂を行い、灌頂を受け終えた少女たちは座に着く。少女たちの掌にスヴァスティカを描き、少女の掌に葉を敷いて、ベルの実をのせ葉とベルの実を糸で縛る。

続いて⑩プラティシュターの前段階として仏のマンドラへの引き入れが行われるが、実際はマンドラではなく瓶が用いられた。まず、僧は本尊へ花や灯明などを捧げる。その後、僧は「三昧耶薩埵」(samayasattva) と、「智薩埵」(jñānasattva) の合一を観想する。続いて僧は満瓶 (pūrṇakalāśa) の上に置いた糸を本尊に結び付け、その糸の端をもちながら本尊が色究竟天から儀礼の場にある瓶 (マンドラ) へ入ることを観想し、瓶へ引き入れた本尊に対し火供を行う。これでマンドラへの引き入れが終わる。その後、⑩プラティシュターが行われた。ここでは「狭義のプラティシュター」と考えられる「本尊への魂入れ」、およびそれに続く「8種の灌頂」が行われた。まず施主は仏が入ったと考えられる瓶の上にのせた五色の糸を持ち、本尊が安置されている本堂の周りを回る。その間、僧は「オーム、フン、フリーヒ、金剛となれ、堅固に住せ、云々」という真言を唱える。この一連の行為により、仏の魂が瓶から本尊像へ移されると考えられ、この場面がプラティシュターの核心部分であると思われる。以上で、プラティシュターの本尊への魂入れが終わる。その後、僧は本尊へほら貝の水、宝冠、金剛杵などを用いて8種の灌頂を行い、真言を唱える。灌頂を終えると、僧は仏に対し儀礼の場にとどまるよう懇願する。最後に送り出しの儀礼を行い、DPが終了した。

### 3. 結び

DPはKSP第6章の影響を受けていると言われるが、両者の最も大きな相違点は、DPにはプラティシュターが10種の行為の1つとして含まれているのに対し、

## (10) ネパール仏教のダシャカルマ・プラティシュターについて (藤 森)

KSP には 10 種の行為の中にプラティシュターが含まれていない点である。すなわち DP はプラティシュターをダシャカルマという通過儀礼の一つとして位置付けている。ブッダバリ寺院で行われた DP は、仏を「ダシャカルマ」という誕生から始まる 10 種の通過儀礼を通じネワール仏教徒の人々と同じように成長させる。そして、その成長過程の最終段階において魂入れ（プラティシュター）を行い、さらにネワール仏教の僧侶カーストのみが行う 8 種の「灌頂」を仏に対し行うことにより、本尊はネワール密教の仏として聖化される。

なお、今回ブッダバリ寺院で行われた DP では、ネワール族の少女が受けるベルの実との儀礼的な結婚である「イヒ」が同時に行われた。イヒには『イヒ供養儀軌』*Ihipūjāvidhi* などと呼ばれるイヒのためだけの別の儀軌があり、筆者が観察したイヒもその儀軌にしたがって行われた。しかし、ブッダバリ寺院で行われた DP で使用された儀軌『ダシャカルマ・プラティシュター儀軌』の中にもイヒ儀礼に関する記述が含まれていることから、DP とイヒは強い結びつきがあると推測される。また、イヒにおいてネワール仏教徒の少女たちは菩提心と同一視されているベルの実と結びつくことにより、少女たちはネワール仏教徒としてネワール仏教徒のコミュニティに受け入れられると考えられる。

1) ネワール仏教徒が行うダシャカルマの 10 項目は地域や時代などにより異なるがその多くはインドのヒンドゥー教徒たちによって行われてきたサンスカラと共通するものが多い。

2) Tanemura Ryugen, *Kuladatta's Kriyāsamgrahapañjikā: A Critical Edition and Annotated Translation of Selected section* (Groningen: Egbert Forsten, 2004), pp.65–72.

3) Alexander von Rospatt, "Remarks on the Consecration Ceremony in Kuladatta's *Kriyāsamgraha-panjikā* and its Development in Newar Buddhism," in: Astrid Zotter & Christof Zotter (eds.), *Hindu and Buddhist Initiations in India and Nepal*, Ethno-Indology 10 (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2010), pp.197–260.

4) テキストは儀礼の手順がネワール語で示され、表白文、真言等はサンスクリットで記されている。Badrīratna Bajrācārya, *Daśakarmapratīṣṭhā, chāhāyeke vidhi vā balimālā* (Kathmandu: Candramāna Mālākāra etc.), 1989.

5) Niels Gutschow & Axel Michael, *Growing up: Hindu and Buddhism Initiation Rituals among Newar Children in Bhaktapur, Nepal* (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2008), p.164.

6) John K. Lock, *Karunamaya: The cult of Avalokitesvara-Matsyendranath in the Valley of Nepal* (Kathmandu: Sahayogi Prakashan, 1980), p.215.

7) Michael Allen, *The Cult of Kumari Virgin Worship in Nepal* (Kathmandu: Mandala Book Point, 1996), p.103.

〈キーワード〉 ダシャカルマ, プラティシュター, イヒ

(東洋大学大学院)